

医療クラーク採用

厚生連長岡中央総合病院 整形外科 矢尻洋一



勤務医の労働環境は、近年、多方面の努力により、やや改善傾向にあるようですが、相変わらずその忙しさは変わらないと思います。その中で医療外業務にあたる保険会社の入院通院証明の書類書きなどの仕事を、ほとんどの勤務医が勤務時間外に行っているのではないかと思えます。

私の専門の整形外科は疾病、傷害保険の入院通院証明のほか交通事故、労災事故等を扱うことが多く、その関係の書類、証明書、このほかに特定疾患の申請書、介護保険の意見書、身体障害者の申請書など多種多様な書類業務があります。医師一人あたりの書類件数は全診療科の中でも一、二番と思えます。また仕事をすればするほど、当

然ですが書類は多くなっています。ただでさえ時間が無いのに書類の山が積み重なっています。私の場合、外来、手術、病棟回診の後、医局に戻り、書類を片付けることになりませんが、平日では間に合わず、休日に病院に行き何とかつじつまを合わせるという状態でした。外来で患者さんから「保険の証明書まだですか？」と聞かれると、冗談で「私が忙しいのを分かっている、そんなことを言う人の書類は積まれている山の一番下に移動します。」などと言つて患者さんに八つ当たりしたこともありました。

書類を除けば、現在では九割以上はサインするだけで済みます。もちろん書類の最終責任はサインした医師本人にあります。当初、彼女たちが問題なく書類を書けるかどうか、不安もありましたが、これは全くの杞憂でした。最初に書き方のポイントを説明すると、その後は特に問題なく、私が書くよりも詳しく、正確に、書類を作成してくれました。そして何よりも受け取る側も喜んでいて、書類を思います。下書きの書類を手エックしが必要があれば修正し、書類にサインをするようになっていきます。今では修正することは稀で、不明なところ、判断に苦慮するところは付箋を入れてくれるので、効率よく、チェックができます。よくここまでカルテを読んで記入できたものだと感心することも多く、まさに専門職だと思えます。

医師のクラークは医療情報のゲートキーパー

新潟大学医歯学総合病院 第二内科 村上修一



新潟大学医歯学総合病院では、現在、医師クラーク(以下クラーク)制度が導入され、外来、病棟で活躍している。本稿では当院第二内科病棟でのクラーク活動状況を報告する。

クラークは、病院医療情報部に所属しており、ここより各診療科に派遣される形で運用されている。当科には一名配属されており、西十一階病棟に勤務している。主な業務は書類管理業務と病棟長補佐業務である。書類管理業務は、医事課を通じて患者より作成を依頼された診断書、証明書の受取から書類の作成代行、医事課への返送までの一連の流れを管理する業務である。

医事課が患者より預かった書類は、一括してクラークに送付される。クラークは全ての書類の種類、担当医、受付期日を帳票に記録する。その後、電子カルテに保存されている書類ひな形に、過去の記載内容を転記して書類を完成させる。その後、担当医に院内電子メールで書類の確認を促す。担当医は電子カルテ上の書類を確認・修正した後、確定保存し、処理終了を院内電子メールでクラークに伝える。これを確認したクラークは、書類を印刷・捺印し、書類が完成した日時を帳票に記録した上で、医事課に送付する。医事課は病院公印を捺印のうえ会計処理して患者へ書類が交付される。

以前は、医事課より医局を通じて個々の医師に書類が送付されていたため、書類の紛失、完成までの遅延が生じていたが、

クラークによる書類流通の一括管理により書類の紛失、完成遅延は皆無となった。また書類は下書きされており、医師の書類作成負担は大幅に軽減されている。

もう一つの業務は病棟医長補佐業務である。病棟医長は患者入院管理を行なっているが、クラークは、外来から送付される入院依頼伝票を一括管理し、病棟医長が入院順位を決定する際、利用しやすいよう保管している。また、クラークは師長や医局医師とのコミュニケーションを通じて病棟の状況を把握しており、病棟医長が入院患者を決定するための情報を提供し、意思決定を支援している。更に入院が決定した患者へは、電話による入院案内も行なっている。この他、クラークは病棟の出入退院の記録、統計データの作成、回診表作成を行なっており、従来、病棟医長が一日一、二時間かけて行なっていた業務を代行している。

以上、クラークの業務を報告した。クラークは医事課、外来担当医と病棟担当医との接点にあつて、書類、情報管理のゲートキーパー

勤務医師



「医師事務作に保険点数加算成二十四年四でも、さらにきめ細かく行同体制の推進『医師事務作

であれば、思いうので業務充実し、医師り軽減する。県内でのこの制い病院では遣はいかががで

しみな



務していた時持ち入院患者が大腿骨近位部骨折は近年さす言葉と毎日のように復帰の手続き。当時電子カーなど而立しておらずあり、いつかを何回書けば思い数えて